

稱讚

第二号

二〇〇三年二月一日発行

仏を仰ぐとき

自分の姿が知らされ

愚かさが

照らし出される

御正忌報恩講も終わり、ほんの少しほつとして、春をお迎への準備に勤しんでおられることと存じあげます。

私も昨年十一月に浄土真宗本願寺派の都市開教専従員の任命を受け、足立布教所を任されることになりました。

只今、布教所の工事の真っ最中でありまして、二月十六日（日曜日）の開所に向け、準備中であります。

この度は当布教所の報恩講さんを勤めるまでに至りませんでした。多くのお寺さんの報恩講さんにあわせていただく機会に恵まれました。

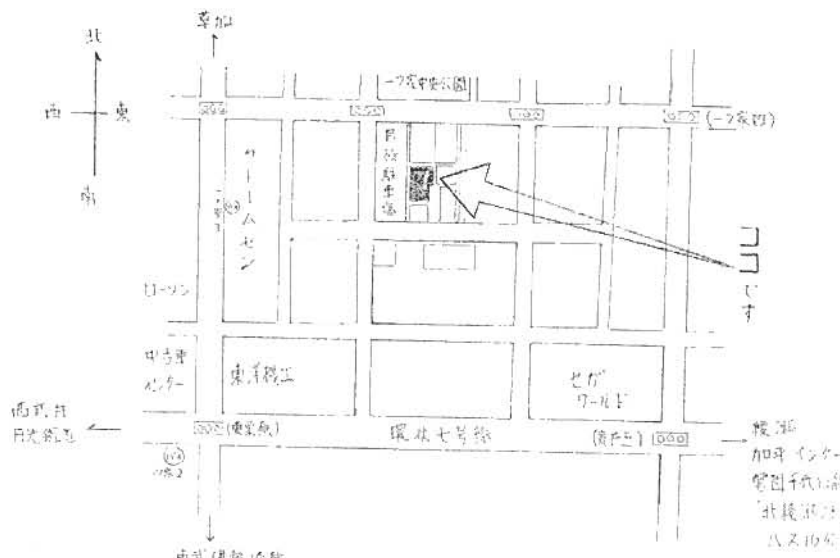
どちらの報恩講さんも賑々しく行われ、数年ぶりに再開されたお寺さんとご門徒さんのご懸命なお姿の中にも慶

びにあふれてお迎えされておられたところもあれば、開基以来途絶えることなく続けてこられたご苦労の中にも先人のお徳を偲びつつ、受け継ぎ、次代に引き継がれていく慶びにあふれたお姿を拝見することができました。

稱讚寺（足立布教所） 電話番号

〇三（五二四二） 一〇二五

二月一五日（土）より開通いたします



〒121-0075
足立区一ツ家3丁目5番20号

足立布教所もいつかはこのような報恩講さんをお迎えできるような活動して参ろうと心に誓わせていただいたことでありました。それまで、たとえ一人の報恩講さんであっても今年の暮れには、当布教所報恩講さんをお迎えしようと思えます。

この度の御正忌報恩講に遇わせていただいた折り、学生時代の友だち、本山宗務所に勤務していたときの諸先輩、熊本の親戚の方々、鹿児島の方々の方々からお祝いをしてくださりました。

皆さんからお祝いしていただいて、つくづく思ったことは、それまでは布教所を開設するのに、自分が一人でやっていたと思いついて、自分が一人やっていたでも、それは大きな自惚れで、本当は多くの人に心配を掛け、迷惑を掛け、支えられていたのだということ。

これから先も、一人でやっているのでなく、多くの方の理解と支えがあつてこそ今日の自分があることを忘れずに活動して参りたいと思えます。

二月十六日（日曜日）からいよいよ開設となります。
毎月十六日を「開法の日」として、朝・昼・夜の部に分けて、法話会を行おうと考えております。

ご都合のよろしい時間帯にお越しただきたい。ご案内申しあげます。

宗祖親鸞聖人報恩講についてII

唯能常称如来号

応報大悲弘誓恩

（大悲弘誓の恩を報ずべしといへり）

『真宗興行』より

第一回目は宗祖親鸞聖人の「報恩講」について、その出遇いの意義についてお話いたしました。そして、現在の報恩講が、第三代ご門主の覚如上人が聖人三三回忌にあわせてお書きになった「報恩講式（私記）」にはじまることを述べました。

また、それまで親鸞聖人を偲ぶ年回法要は執り行われなかつたのではなく、多くの方に阿弥陀如来のご本願・お念仏のみ教えをお伝えくださった聖人のお徳に感謝するご法要は毎年行われていたのだと思えます。

そして、「報恩講式」が世に出ることがなかつたならば、七百数十年、途切れることなく続けてこられた「報恩講」はその趣旨・形が変わっていたかもしれぬと思えるのです。それは単に聖人を偲び、追善供養の法要になつていたのでないかと思えるのです。

「報恩講」がこれまで途切れることなく、寺院並びに門信徒の皆さまの間で賑々しく行われてきたのは、「報恩講」の意義が正しく継承され、私たち先人のお徳の賜であります。

『報恩講式』は親鸞聖人のお徳について三つに分けて書かれており、私たちに阿弥陀如来のご本願をお示しくくださった遺徳を身に承け、お念仏申す身にならせていただいたことをよるこび、感謝することが、ご恩に報いることであると書かれております。

- その三つとは
- 一つには、「真宗興行の徳を讃ず」
- 二つには、「本願相應の徳を嘆ず」
- 三つには、「滅後利益の徳を述す」

真宗興行の徳を讃ず

親鸞聖人は二十年間比叡山で修行なさいましたが、自力の修行では自分は悟り得難いことを知って、法然上人が説かれてある浄土の教え、お念仏の教えに出遇い、自分には阿弥陀の本願しかないことを知らされるのであります。

「建仁辛酉の曆、雑行をすてて、本願に帰す」と言われ、法難にあり、流罪で越後に流され、その後、関東に二十年ほどおられた間、当時社会的弱者と言わ

れる方々と生活を共にすることにより、いよいよ阿弥陀の本願の確かさを深められました。

私たち凡夫が仏になるには浄土の教えしかなく、お念仏は「浄土を真実の宗とする」教えであることを生涯かけて伝えられました。

それは、皆さんご存知のように「恩徳讃」に謳われるように「如来大悲の恩徳は身を粉にしても報ずべし、師主知識の恩徳も骨を砕きても謝すべし」と、そこそ親鸞聖人自身が血のにじむ思いで、阿弥陀仏の慈悲に報いようとされ、同時に「南無阿弥陀仏」のお念仏の教えを自身に正しく教えてくださった七高僧を中心とした「浄土を真実の宗」とされた方々に報謝なさつたのです。

この私たちも自らに信じさせられたお念仏の教えを人々に伝え、阿弥陀如来の本願に出遇っていただきたいという親鸞聖人の「自信教人信」の姿勢に報恩感謝して、お念仏申しましようといつ目は言われるのであります。

「真宗興行」と言われますと、親鸞聖人が浄土真宗を開いたのだと聞こえそうですが、聖人自らは「智慧光のちからよ

り、本師源空あらはれて、浄土真宗をひらきつつ、選択本願のべたまふ」と謳われておられるように、「浄土真宗」を自分が起こしたのではなく、師である法然上

人が私たちに明らかにしてくださった二弥陀の本願—を私（親鸞）は伝えていたのだとおっしゃっていただけるのです。

でも、この私たちにとって、親鸞聖人がそのお念仏を正しく伝えてくださらなかったら、今、お念仏を申す身にならさせてもらってなかった意味から、聖人のお徳を讃えましようということなのです。

本願相応の徳を嘆ず

お念仏は阿弥陀如来の本願のはたらきであり、自力では浄土に往生できない、仏になれない私たち凡夫のための如来の本願の教え、はたらきであることを親鸞聖人は明らかにされました。

その明らかにされたこと自体が、阿弥陀如来の本願にかなった私たちへのはたらきであり、私たちにはそれしかない、本願他力しかない、どうしようもない自分であることと同時にそういう自分をこそ、すくいのためであり、すくつてくださる本願のかたじけなさよと嘆ずる。そのことを聖人自ら身をもってお示しくださいました。出遇えたことにより一層の自らの至らなさを嘆き、聖人のお徳に報謝しましよう。二つ目はいわれるのであります。

この第二段の中に、「信謗ともに因とな

りて同じく往生浄土の縁を成す」と阿弥陀の本願を疑うものさえ、必ず信心を獲、弘法を中傷するものもついに心が翻ると親鸞聖人は常日頃おっしゃっておられました。その慈悲深き、教えは誠に阿弥陀の心にあいかなった教化・伝道であると述べられております。

ここに「嘆ず」とあります。嘆ずることがどうして報恩感謝なのだろうと思えるのですが、嘆ずるには、「なげきかなしお」意味の他に、「感じてほめる」意味があります。そして、「嘆異」という熟語には、「異なることを嘆く」意味ではなく、「すぐれているところを感じ入る」という意味があるそうです。

ここでの「嘆き」とは、悲痛な叫びをいうのではなく、「こんな私が、仏にならせていただくのか」という感動をいうのです。（次回詳細予定）

滅後利益の徳を述す

聖人亡き後も私たちにお念仏を相続させてくださり、常に私たちに阿弥陀如来の本願がはたらいてくださっていることを感じ入らせてくださっている。親鸞聖人は亡くなり、即往生され、即還相のはたらきとして、常にお念仏のはたらきを示してくださっています。

それもこれも、直接、聖人にお遇いす

ることでもできなかった私たちに残してくださった多くの御書物が教えてくださっていることであり、この私たちも親鸞聖人のご意志を継いで、お念仏の教えを伝えていこうと決意させてくださったことに報恩感謝しましよう。三つ目は言われるのであります。

「述」とは「受け継いでのべる・伝える」という意味があり、お念仏の教えを私たちが受け継いでいくことが何よりの報恩感謝であり、仏徳讃歎であるということなのであります。

ただ、ここで、親鸞聖人を教祖として崇めるにとどまるなら、単なる親鸞教になつてしまいます。

親鸞聖人のお力を信じ、それに頼るというのではなく、宗祖親鸞聖人は善知識として私たちに阿弥陀の本願のはたらきをお示しくくださり、導いてくださったところに「南無阿弥陀仏」のお念仏の営みを通して報恩感謝する姿勢が大切なのではないでしょうか。

そして、私たちのご先祖、亡きご家族の方の法要も、追善供養の意味ではなく、「いのち」のつながりを感じ謝するに留まらず、この私に仏縁を賜り、弘法に出遇わせていただいたご恩に報う法要でありたいと思えます。